

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

研究科セミナー

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第32回

「二十世紀西洋における女性、ジェンダー、戦争～広範な歴史叙述の試み～」

フランソワーズ・テボー（アヴィニオン大学名誉教授）

10月10日、グローバル・スタディーズ研究科主催による連続セミナー「グローバル・ジャスティス」の第32回が行われ、講師にアヴィニオン大学名誉教授であられるフランソワーズ・テボー氏をお迎えして、「二十世紀西洋における女性、ジェンダー、戦争～広範な歴史叙述の試み～」というタイトルでお話しいただいた。テボー氏は、戦争と社会変動の歴史を特に女性の経験に焦点を当てることでジェンダーの観点から研究されている。2001年から2009年まで「ムネモシユネ-女性史およびジェンダー史振興協会（Mnemosyne-L'Association pour le développement de l'Histoire des Femmes et du genre）の会長を務められた氏はまた、全5巻からなる『女の歴史』（藤原書店、1998年—原題：*Histoire des femmes en Occident*）の編者のひとりとしても知られている。

はじめにテボー氏は、今回の講演は女性及びジェンダーの観点から二十世紀の戦争を読み解こうとする四十年に及ぶ歴史研究の総括であると述べた。女性史に関心を寄せ、ジェンダーの観点を盛り込むことは戦争に対する理解をどのように変化させてきたのか説明することが講演の目的であった氏は、歴史叙述のいくつかの傾向を明らかにすることで、可能なアプローチの多様性を強調したいと付け加えた。おおよそ二時間に及んだ講演は以下のような流れで行われた：1）女性と戦争／戦時下諸国民の社会史、2）ジェンダーと戦争／戦争の文化史／新しいパースペクティブ、3）最近の研究の動向／幾つかのテーマへの収斂。以下はその概略である。

1）女性と戦争／戦時下諸国民の社会史

従来、戦争は男性だけに関係のある事象だと見られていた。これには、兵力として戦争に従事したのが主に男性であるという理由以外にも、軍事的・外交的側面に焦点を当てた伝統的な歴史研究がエリート男性を中心に据えたものであったことによる。しかし、1970年代に入ると、このような歴史理解に批判的な立場をとる社会史研究者が登場、これに並行するかたちで女性史研究も本格的に始められた。この分野の研究者達は、混乱に落とし入れられた戦時下の社会に生きた女性達を可視化し、彼女達の経験を語ることで、既成の枠組みに捉われない戦争理解を目指してきた。女性史や社会史が提案した「下からの歴史」—すなわち、民衆を主体にした歴史—というアプローチはそれまでの歴史理解に根

底から疑問を投げかけるものであったが、とりわけ1977年にフランスで出版された共同研究書『もうひとつの前線』は歴史叙述の転換点を示す重要な出来事であった。これ以降、とくに英語圏で同様のアプローチを用いた研究が相次ぐことになる。

女性史ないし社会史の発展は、歴史研究の分野で従来用いられてきた新聞や雑誌、公的アーカイブスなどに加え、女性の手による手紙や日記、戦後に書かれた回想録、そしてインタビュー等の史料としての有用性を提唱し続けてきた。これらを史料として用いることは、個人の経験を歴史的文脈に位置づけて語るうえで重要となる。女性活動家に対しテボ一氏自身が行った聞き取り調査で見えてきたのは、女性は戦争において自らが担った役割を過小評価する傾向にあるということだ。食事を与える、他人を匿う、密に連絡を取り合うなどの活動は戦時下の社会にあって極めて意義のあるものばかりだが、行動意識が日常生活に密接に関連していた為、彼女達の多くは「そうする事が当たり前だった。」、「たいした事はしていない。」と話す。

女性の存在を軸とした戦争理解とは、例えば、戦時下の社会において女性はどこにいて何をしているのか、そこで肉体的・精神的にどのような経験をするのか、戦争は個人の人生および社会における女性の地位にどんな影響を及ぼすのかといった問いを伴うことが多い。これらの問いを通して戦争中の多様な女性像の可視化を試みるわけだが、多様な女性像には看護婦や男性に代わって働く労働者以外にも民族解放戦争において兵力として戦線に赴く女性も含まれる。また、女性中心に据えた戦争史研究が各国で進むにつれて国家間での比較や国家の枠を越えた分析が可能となった。例えば、第一次世界大戦におけるドイツの敗戦は、同国がイギリスに比べ女性の動員に失敗したことにも一因があると主張する研究者もいる。

女性史や戦争史研究が発展するにつれてひとつの問いが議論的になってきた。それは、「はたして戦争は女性を解放したのか?」というものである。戦場に赴いた男性に代わって女性が労働に携わった事実を女性の社会進出とみなす研究は多数存在している。1920年代のフランスを例に挙げ、ギャルソンヌと呼ばれた短髪を基調にしたボーイッシュな女性の登場を戦後の自立した女性の象徴と見なすことも出来るだろう。また、同じくフランスにおいて、第二次世界大戦中の1944年に女性に参政権が付与されたことは注目に値する。しかし、その一方で、戦争によってもたらされた変化は、大抵の場合、一時的かつ表面的なものでしかないと論じる研究者も多い。この問題に明確なかたちで結論を出すことは容易ではないが、女性にとって戦争とは、たとえ時期や場所、階級、民族、年齢によって個々の経験が異なるにせよ、また、戦時下社会で新たな労働機会の提供があったにせよ、何よりもまず試練であったということは忘れてはならない。

2) ジェンダーと戦争／戦争の文化史／新しいパースペクティブ

ジェンダーの視点からみた戦争に関する研究としては、ハーバード大学で行われたシンポジウムを基に出版された *Behind the Lines: Gender and the Two World Wars* (Yale University Press, 1987) がよく知られている。同著作で示されている通り、ジェンダーに基づく戦争理解とは、性差に基づく社会的役割を相対化し、男性的なもの／女性的なものを定義してきた表象の推移を観察することで、とくに戦争による女性解放の問題を新たな視点から検討するというものである。この目的を達成する為には、戦前・戦中・戦後における男性の物的また法的状況を比較すると同時に、戦争により生じた変化が顕われる文化的側面に注意を向けることが重要になってくる。この分野の研究が明らかにしているのは、男性と女性とでは戦争の経験が異なること、そして多くの場合、女性の役割は男性に対して従属的であるということである。

これに加えて、女性だけでなく男性も「性」を備えた個人であり、「男性らしさ」は空間と時間によって変化する文化的・社会的構築物とする主張もジェンダー研究者によって繰り返されてきた。戦時下の社会は「男性らしさ」を巧みに築きあげ、それを用いて男性達に「たくましくあれ。」と呼びかけることで動員する一方、敵国を女性とみなすことで弱体化させようとする傾向にあった。しかし、戦争はその「男性らしさ」をも試練にさらし、男性の自尊心を打ち砕く。肉体的な苦痛に加え、戦争神経症と呼ばれる疾病、また理想化された戦争と現実のそれとの隔たりに起因するアイデンティティの危機などは男性が戦時下の社会で経験する代表的なものである。これらの体験は、怪我を負った軍人の写真、また、ある兵士が婚約者へあてた手紙（そのなかで彼は理想の男性像から程遠い自らの戦争体験を嘆いている）などに読み取ることが出来る。

戦争の文化史とは、それまでの歴史叙述に対する反論として、次の二つの目的を備えたものと定義することが出来る：1) 戦争の暴力を露にし、無機質な歴史叙述を行わない、2) 戦争文化を明確にする。この分野に属する研究者達は、退役軍人らによって隠蔽されてきた戦時中の暴力の実態を明らかにするよう努めてきたが、その過程で、あらゆる証言が歴史家により歴史的な脈のなかで注意深く検証される必要性を強く訴えてきた。戦争の文化史という分野に女性史・ジェンダー史の観点をを用いれば、個人及び集団の戦争への動員はより複雑なものであったと捉える事が出来る。例えば、戦時下の女性間での差異に着目した研究はその好例だろう。第一次世界大戦中のフランスやドイツ、イギリスのフェミニスト達のなかには戦前の国際主義を否定して敵国打破を唱えるものが多かった。この背景には、戦争が続く限り敵国の国民は女性といえども敵だという認識が彼女達のあいだにあったが、これは当時の一般の女性の経験とは異なるものであった。

戦争の文化史はまた、戦時下社会で女性が受けた暴力の範疇を否定的な言説や表象にまで拡大、これらも個人にとって忘れがたい戦争トラウマを生む要素であると論じる。例え

ば、第二次世界大戦下のフランスにおいて、二万人にも及ぶ女性達がドイツに対し協力を行ったとの理由から剃髪の処罰を受けた。当時の新聞が「清めの丸刈り」と読んだこの肅正は、対独協力者に対する性差に基づく懲罰であったが、女性の髪を剃ること一つまり、女性の身体を支配すること一によって当時の男性の権威の復活を目指したものとして解釈することが出来るだろう。

3) 最近の研究の動向／幾つかのテーマへの収斂

戦争からの脱却が意味する本当のところは単に武器を置いて平時の活動を再開するだけに留まらず、また、平和を構築するという事は外交上の条約締結を目指すのみならず、男女間で平和を結びジェンダー秩序の再構築を伴うものでなければならないというのは、1990年代の多くのジェンダー研究者が主張する通りである。一方、戦争の文化史は、第一次世界大戦後の社会研究を通して、文化的動態および暴力の浸透という概念を打ち出した。こうした概念はあらゆる戦争において関連性をもつものである。

また、近年は各個人の私的世界も歴史学の研究対象としてとりあげられる傾向にあり、戦時下における私的世界の研究は、個人史としての戦争研究の重要性を唱えている。少なくともフランスでは10年ほど前から一般人男女の個人的経験を扱う戦争史研究が発展するに伴って、自伝や手紙のやり取りをまとめた書物の出版が相次いでいる。こうした刊行物は戦争に対する新たな視点を提供するとともに、集団としての記憶・歴史形成の過程を理解するうえで重要な要素である。

戦時下におけるセクシャリティもこの私的世界史の重要なテーマのひとつである。具体例を挙げると、戦時下の兵士及びその妻のセクシュアリティの統制に関する研究、また、恋愛関係および性的暴行の結果産まれた子ども達一例えば、第一次世界大戦中に仏独間で生まれた子どもや植民地解放戦争中に生まれた混血児など一にも焦点を当てる研究も増えている。これに加え、戦時下の社会においていかにして性暴力が行使されたかを検証する学者も存在する。例えば、性差に基づく暴力であるレイプは、その実態を把握する事が困難ではあるが、社会的かつ文化的、また政治的意味合いを把握するうえで大変重要である。これらの研究が示しているのは、戦争は、女性達にとって身体に刻まれた試練であったと同時に 男性にとっても（とくに精神的）苦痛であったということだ。

戦争経験とトラウマの痕跡と呼ばれる研究も近年著しく発展してきている分野である。戦争の記憶についての研究のなかには、戦後のフランス社会が過去の戦争に対しどのように対処してきたかに焦点をあてるものに加えて、戦争博物館の意義を問うもの、様々な記憶の間にみられる軋轢やジェンダーに関する記憶の差異に着目したものなどがあり、研究分野としての幅が広いのが特徴である。これら記憶に関する研究は、記述ないし口述された証言に対する複雑な分析を促すものであり、こうした証言を歴史的な脈に位置づけて考

えるうえで意義のあるものである。また、戦争の痕跡を研究するというのは、戦争によって身体、精神、および風景のなかに刻まれた痕跡を検証していくものであり、戦争の痕跡にみられるジェンダーは今後発展が望まれる分野でもある。

(文責：山田優理)